

編集後記

2022年度もコロナ禍により、研究活動はさまざまな制約を受けざるを得なかった。そのような中でも、名桜大学の山里純一先生をお招きして公開講座「沖縄の習俗と説話」を開催することができたことは、今年度の大きな収穫であった。年度末には今林直樹が与那国島ヘリサーチに赴くなど、本格的な活動再開に向けて準備が整いつつあるのは嬉しいことである。

それにしても気がかりなのは、昨年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻である。この戦争の余波により、台湾有事の危険性が注目を浴びることとなり、沖縄の陸上自衛隊部隊の増強が閣議決定されるなど、穏やかでない空気が流れている。沖縄県民にとって、こうした動きは78年前の惨禍の記憶をよみがえらせる、心を抉るものであろう。

琉歌に、次のような作品がある。

「のどかなる御代の春風にひびく笛と三味線の音のしほらしや」

(平和な時代に、春風と共に響いてくる笛と三味線の音が実に美しい)

「春や世の中も匂につつまれて人の肝までも花になゆさ」

(春のこの時、世の中全体が花の匂いに包まれて、人の心までが花になって香るように思えて来る)

何となく読み飛ばしてしまうような歌であるが、今の時世を考えると、俄かに胸に迫って来るものがある。琉歌の背景にあるのは、想いを詠みあげることにより幸いを招くという言霊思想であり、歌は祈りの言葉でもある。不穏なこの時には、上のような素朴な歌が心の祈りとして光を帯びて来る。

このような中であっても、沖縄はウクライナからの難民を積極的に迎えるなど、平和の回復に向けて活動している。われわれもその動きに連帯して行きたい。

(文責 栗原 健)